

あとがき

今回の展覧会は山田正亮(1930-)の新作展で、油彩とガッシュを展示することになった。

カタログのテキストは美術評論家の篠田達美さんにお願いし、「色彩と構造—山田正亮の新作について」と題するエッセーをご寄稿いただいた。篠田さんは山田正亮の作品を丁寧にみておられる評論家であるが、このエッセーでは新作を論評されると同時に山田正亮の色彩について論究されておられる。観者は山田正亮の作品をご覧になると同時に、篠田さんのエッセーもぜひお読みいただきたいのである。興味ある論稿をお寄せいただいた篠田達美さんに厚く御礼申し上げる。

私は山田さんのアトリエで今回展示の作品をみたが、大作「作品F.140」(259×388cm)には感動した。斜めのストロークが一段と力強くなり、構成ががっちりとして力感に満ちている。この画面のところどころに四角い窓のような空間がある。それは私に1957-8年頃の山田正亮の長方形シリーズの作品を思い出させる。今回の画面のなかの窓のような部分の色彩は、35年前のそれとは異なる。35年前は重かった。しかし今回はのびやかで明るいのである。一人の人間、作家のやるしごとは、時代的にみると全く断絶しているように見える場合があるが、それは全くの断絶ではなくてむしろ転換というべきものだ、と思う。それは非連続にみえても連続しているのだ。

山田正亮はしっかりしごとをしている。それはわれわれにとってうれしいことだ。

ところで、この展覧会は、当画廊における17回目の山田正亮展である。そのうち海外展はパリ、ベルリンの2回、アートフェアはNICAFF1回を含んでいる。当画廊の創立は1978年3月であるから今年3月でまる15年を迎えることとなるが、この山田正亮展は141回目の企画展に当たる。つまり1年に9.4回企画展を開いている勘定になる。このなかで山田正亮展の回数は断然群を抜いているのだ。

また、展覧会カタログはこの山田正亮展で丁度100冊目である。(カタログの末尾に通しナンバーが付してある。)勿論、数が多ければいいと言うものではない。質の問題こそ問われるべきである。特に美術の世界は質がすべてなのだ。そのことは重々承知のうえで、この100号という数字をみると私はいささかの感慨に耽らざるを得ないのである。

そして、その記念すべき100号がほかでもない山田正亮のカタログであるという事実に驚く。偶然の一一致であるが、出来すぎていて、單なる偶然とは思えない。一種必然的なものを感ずるのである。不思議なものである。

このところ、山田さんの体調は一時に比べはるかに良いのはうれしいことである。われわれにはまだやるべきことが多い。山田さんのご健勝と今後一層のご健闘を心から祈念するものである。

1993年2月14日

佐谷画廊

佐谷和彦